リアルドリーム文庫
寝取り旅館
ねとりりょかん
ドクズおじさんのネトネトしつこい美少女凌辱
莉奈編
試し読み版
挿絵／篠岡ほまれ
大角やぎ

Synopsis

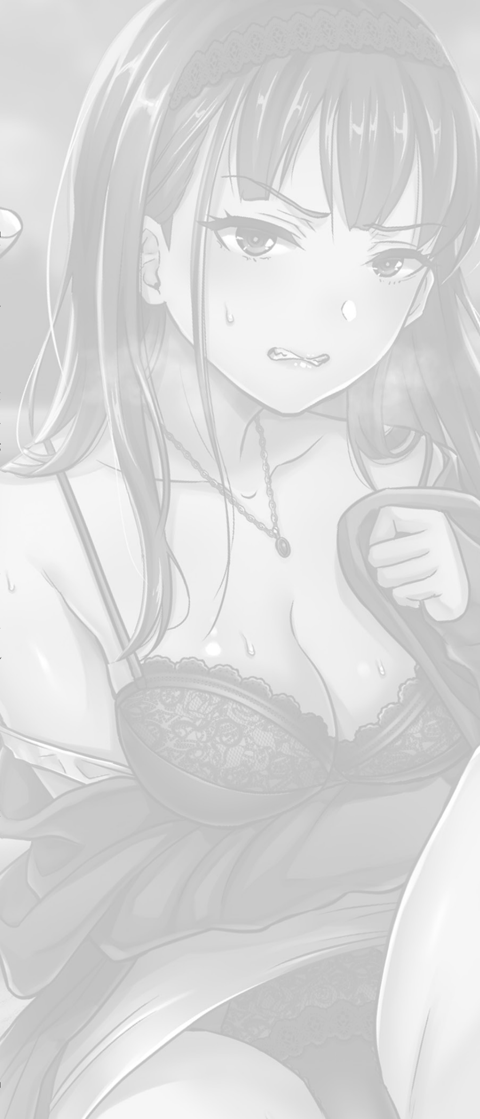
あらすじ

とある漁師町のペンションに訪れ、幼馴染三人で旅行を満喫する菜子、莉奈、翔。だがその宿の主・拓郎は、気に入った女に一服盛っては悪戯を仕掛ける極悪非道な男だった。拓郎に見初められた女子校生・菜子は執拗な陵辱を受け、さらにはその痴態を撮影されてしまうことに。動画をネタに脅迫され抵抗も許されず、強制セックス漬けにされていく菜子。やがて彼女は「親友を売れば助けてやる」と拓郎の悪魔の誘いを聞き入れてしまい……？

Contents

目次

プロローグ　～白谷菜子の絶望～……4
第一章　黒髪美少女と昏睡恋人セックス～処女膜をゆっくり破る肉槍～……6
第二章　美脚の極上メス、完全捕獲される……27
第三章　聖夜の淫語中出し……50
第四章　黒髪美少女、カメラに向かって完全同意する……74
第五章　謹賀新年、チンポ様へのご挨拶……97
第六章　黒髪美少女の豪邸でいちゃらぶお部屋セックス……123
第七章　拓郎、通い妻になり半同棲する……149
第八章　キャットファイト……173
第九章　ずっと三人で 前編……203
第十章　ずっと三人で 後編……240
エピローグ……261
番外編　生意気カノジョの育てかた ～中出し好きカノジョの成長記録～……266
番外編2　犬タイプと猫タイプ ～莉奈編～……286



登場人物 *Characters*

腐水 拓郎
（ふすい たくろう）

漁師町でひとりペンション経営をしている。性格は悪く被害妄想癖があり、狡猾で残忍。少女に淫語を言わせて征服欲を満たす性癖がある。

白谷 菜子
（しらたに なこ）

清楚で控えめな女子校生。細身だがＧカップの巨乳の持ち主。幼馴染の翔に想いを寄せ、親友の莉奈とともに拓郎のペンションに訪れる。

黒那 莉奈
（くろな りな）

生意気でクールな女子校生。Ｄカップのスレンダーなボディと長い脚のモデル体型。菜子と同様、幼いころから翔に恋心を抱いている。

桃田 翔
（ももだ しょう）

菜子、莉奈が想いを寄せる長身のイケメン。二人との関係を壊したくないため、好意に鈍いふりをしている。

プロローグ　～白谷菜子の絶望～

暗い海岸線に雪がちらついている。
わたしこと白谷菜子（しらたになこ）は肩を震わせながら、後ろを振り返った。
タクシーのリアガラスから遠く、漁師町の灯りが見える。
「ああ、莉奈（りな）、りな……」
とんでもないことをしてしまった。誰よりも大事な親友をあの悪魔の巣に置き去りにしてしまった。
だけどどうしたらよかったんだろう。あの男へ恋人のように膣内射精を懇願する動画をたくさん撮られてしまった。肛門を舐める姿もたくさん撮られてしまった。警察に言おうにもあれが流出するのは耐えられない。
あの男に失うものなんて何もない。あんな男にどうやって対処すればいいのかまったくわからない。
終わった。手詰まりだ。
でもあんな最低な脅迫に耐えられる人間なんかいない。ぜったいに。
悪いのはわたしじゃない、あの男だ。わたしが責められるなんて間違ってる。

頭を抱えているとスマホが震えた。メッセの着信だ。

翔『最近どうした？　やっぱ元気ないぞ。俺なんでも聞くからな。菜子はすげえ大事な友達だからさ』

「翔くん……」

最悪のタイミングだ。彼に甘えたくなってしまった。

明日のクリスマスイブ、莉奈を彼に会わせたくないと思ってしまった。わたしが隣にいたいと思ってしまった。そんなこと絶対に思っちゃいけないのに。

「わかんない、わかんない、わかんない……」

涙が手の甲に落ちた。タクシーの運転手さんが「大丈夫ですか？」と声をかけてくれる。

タクシーが海岸線を走る。

温かい光を放つ都会の街に向かっていく。

第一章　黒髪美少女と昏睡恋人セックス　～処女膜をゆっくり破る肉槍～

一二月二三日夜。拓郎の経営するペンション。

菜子の助けを借りて、拓郎はとうとう黒髪美少女の莉奈を昏睡させることに成功したのだった。

今回の『遊び』は、むしろこの女が本丸ともいえた。

長い黒髪をさらさら揺らす、クールなモデル系の美少女。

この女は、はばかることなく拓郎を罵ってきたのだ。だからしっかりお仕置きしてやらなければいけない。復讐してやらなければいけない。

菜子は強制的に帰宅させ、いまペンションには拓郎と莉奈の二人きり。

この古ぼけた小さな建物には、陰湿なバケモノと浴衣をはだけさせた無防備な獲物しかいない。

そのバケモノ――腐水拓郎は、下卑た笑みで思考をめぐらせた。

宿泊部屋でもいいかと思ったが、やはり管理人室で『遊ぶ』と決めた。

宿泊部屋はやはり商売道具なので汚したら面倒だという理由と、拓郎の匂いがしみついた巣に美少女を引きずり込むのが、神聖なものを汚している感じがあって興奮す

るからだ。
　ペンション二階の廊下。拓郎は浴衣姿の黒髪美少女、莉奈の肩を支えて引きずる。
　さあ、今回もやるぞ、最低最悪の『遊び』を。
　拓郎は管理人室のドアを開けた。はずみで莉奈が倒れそうになったので、まっすぐに抱きかかえる。長い黒髪がさらさらしていた。ファッション誌のモデルらしく、ほっそりとしているのに柔らかい。
　何より匂いだ。柑橘と石鹸の華やかな匂いが、至近距離だと濃い。
　トップカーストの美少女の匂いだった。
　健康的な甘い体臭と高級シャンプーや化粧品がほのかに混じった匂い。こんな匂い、嗅げばどんなオスだって強烈（きょうれつ）に交尾したくなる。交尾したいあまりにこの女への服従まで誓ってしまいそうな傲慢な匂いでもあったが、この極上の匂いを放つメスはまもなく拓郎と交尾する予定なのである。
　心臓がバクバクする。だが遊び心は忘れない。
　まずは真っ暗な管理人室に莉奈を連れ込んだ。いろいろな方向から隠しカメラでRECがされているこの部屋で、拓郎はしっかり演技をする。
「お、お客さ～ん。お連れ様が帰られたからって、絡み酒やめてくださいよ～」
　演技する。菜子の時と同じように。

「髪引っ張らないで。私、お連れ様に何もしてませんよ。落ち着いてください」
浴衣越しに尻をむんずと掴む。張りのあるいい尻だ。
「トイレですか？　吐くんですか？」
即押し倒すか迷ったが、覚醒度を調べるためトイレで痴漢してみることにする。
「大丈夫ですか？　ハァハァ……大丈夫ですか～？」
管理人室の狭いトイレで、吐かせるふりをして全身を触りまくった。
浴衣に手を入れる。きめ細かく、しっとりさらさらしている最上級の肌だ。
まったく覚醒しないので拓郎は浴衣をまくった。ショーツに股間を当てて、拓郎の好きな着衣交尾をしてみる。
「ん、ん……っ」
柔らかく張りのある胸を揉みながら、秘部に股間をこすりつける。もっちりした尻が股間に吸い付く。秘部も柔らかい。ああ、早く挿入してえな。
拓郎が股間を押し付けると莉奈は時折身じろぎをしたが、それだけだ。しっかり眠っている。
さあ、俺の臭いのしみついた六畳一間、せんべい布団にベッドインするぞ。
「うわわ、やめてくださ～い」
拓郎は莉奈を引きずり、わざとらしく布団に押し倒される演技をする。

「な、何するんですか？　私を誰と間違ってるんですか？」
暗い部屋の中、バタバタと抵抗する演技をすれば、あとはもういいだろう。動画編集でつなげばいいだけだ。
拓郎は莉奈の身体をよけて、むくりと起き上がった。
そうして電灯をつけた。
明るい部屋の中、莉奈が布団にうつぶせになっている。浴衣はほとんど脱げかけていて、ナマ脚とショーツは全開になっていた。
エロい。ずっとこの脚と尻にスケベしたいと思ってたんだ。
拓郎は全裸になった。莉奈を丸めた布団の上にうつぶせに転がして、尻を持ち上げた姿勢にする。
そのましげしげと、尻と脚を鑑賞してみた。
骨盤がきゅっと上を向いて交尾をねだるような、健康的で煽情的な尻をしている。さらに純白の美脚がすらっと伸びて良質なＤＮＡを誇示している。もし中出しして孕ませたら、子供はきっと恵まれた長身に育つに違いない。
拓郎はたまらず生のペニスをショーツに押し付けた。
持ち上がった尻の秘部にこすりつけて、布越しに生温かく柔らかい感触を味わう。すべすべの太ももにすね毛だらけの短足を絡めて腰を振る。

気持ちいい。ファッションモデルもしている美少女と交尾の真似事をしていることに興奮が止まらない。
早くナマ挿入しろとペニスがざわつく、このもどかしさがたまらない。
「ん……んぅ……」
莉奈の呻き声が聞こえてきた。拓郎はこすりつけを止め、うつぶせで腰を突き上げる美少女のショーツを脱がしてみる。
いやらしい匂いがむわりと香った。
下卑た笑みを浮かべ、ショーツに隠されていた秘部を見つめてやると――。
莉奈の肉唇は、綺麗な一文字のピンクだった。
拓郎は思わずカメラを取って、撮影する。
バシャ！　バシャバシャバシャ！　と無防備なピンク色の粘膜に、連写でフラッシュを浴びせていく。あまりに美しい形のマ〇コだったのでつい撮影してしまった。美しく盛られた料理を見ると撮影したくなる気持ちに似ている。
もちろん、これから食べるのも一緒だ。
「いただきま～す」
ぱくり。拓郎は莉奈のピンク色の貝にかぶりついた。
粘膜を舐める。塩っ気がたまらない。それに匂いもいい。普通マ〇コというものは

臭いのだ。なのにこの美少女のマ○コは野山の花のような匂いがする。
拓郎は莉奈の肉唇を夢中で舐めた。
「ん……♡　んっ」
そのうち喘ぎ声が聞こえてきた。そして、
「翔……？」
突きあがった尻の向こう頭から、ぼんやりとした問いがあった。
おそらく莉奈は間違えているのだ。間違えているというよりは夢や幻覚を見ている状態に近いのだろうが、愛しの翔くんと汚い中年男を確かに間違えている。あの時の菜子と同じように。
「そうだよ」
拓郎が声真似して答えると尻穴と肉唇がきゅっとすぼまった。穴で返事してんじゃねえよ、と笑いそうになりながら、拓郎はピンク色の肉唇を舐め続ける。
「だめ、だめよ……きたない」
莉奈は半分夢の中だ。一番『遊び』やすい状態ともいえる。
「莉奈のマ○コ、きれいだよ」
「ん♡　だめ……ばか翔っ♡」
肉唇が濡れてきた。拓郎はそろそろかと思いクンニをやめる。

そしてまた電気を消した。暗闇の中、息を荒くした莉奈の浴衣をはいで全裸にしてから、仰向けに寝かせ正常位で覆いかぶさる。
裸に裸で抱きつくと、全身吸い付くような触感の肌だった。
「俺だよ、翔だよ」
「ん……♡」
暗いせいで顔を認識できていない。
勘違いしたままだったので全身をすりつける。かき抱くように少女の全身を味わうと、肌がすべすべさらさらと気持ちいい。少女の胸が押し潰されて、互いの乳首も擦れてくすぐったい。何より美少女の濃厚な匂いがたまらない。
このまま挿入したかったが、ここからが『遊び』の始まりなのだ。
拓郎は莉奈に抱きついたまま、耳元に唇を近づけ、
「俺だよ、翔だよ」
「ん……♡」
「莉奈、俺のこと好き？」
莉奈は無言だったが、はにかんだように首肯（しゅこう）した。
だから翔になりすました拓郎は答えた。
「でも、俺、莉奈のこと嫌いだわ」

「…………！」

「いつも言葉キツいし偉そうだし、莉奈なんて嫌いだ。菜子のほうが好きだわ。可愛くて優しいし」

「……い、やぁ……っ」

嫌い、の言葉にびくっとなった後、明らかにショックを受けて震えていた。

「菜子のほうが胸も大きいし、莉奈って菜子に勝てるとこあんの？　このブス、貧乳」

「ひど、い……言わ、ないで……」

「うるせえブス。嫌いだわ。ブス、貧乳、ブスブスブース、貧乳。お前のどこに魅力があんだよ」

「……ひぐっ……いやぁ……」

クール美少女の涙声に、拓郎はギンギンに勃起していた。ただし、罵ったものの莉奈は貧乳ではない。おそらくDカップはある。

それはともかく拓郎は翔になりすまし拒絶を続けた。

「クリスマスも菜子とデートするわ。莉奈とはキャンセルな。だって嫌いだし。もう近寄ってくるなよ」

「……やぁっ……頑張った、のに……」

「じゃ謝れよ。ちゃんと謝れ」

「あ……ごめんな、さい……ごめんなさ、い……ゆるして……ひぐっ……」
あの高慢ちきな女を、泣きながら謝らせた。
最高の気分だった。十分に気が晴れたので、慰めてやることにする。
「うそだよ、莉奈のこと好きだよ」
言って耳に軽くキスしてやる。
「あ……♡　ほんと？　ゆるして……」
「ごめんな。莉奈が可愛いからついついイジメちゃった☆」
拓郎自身、寒すぎると思ったほどのイケメン台詞だったが、
「ぐすっ……ほんとう？」
「仲直りのキスしよ？」
「…………うん…………♡」
ちゅ、と軽くキスをする。
そして、ねっとりと舌を滑り込ませる。
「ん♡　ちゅ、んむ……あ♡　んむ♡」
舌をベロベロ絡ませる。イケメンと勘違いしているせいか莉奈も積極的だ。舌を伸ばして拓郎の舌を必死に舐め上げてくる。
菜子もそうだが、プレイで舌絡みを強制させてもどこか一〇〇％ではないのだ。

だが今回は違った。莉奈は積極的に自分の粘膜を絡ませようとしてくる。
だから拓郎も本気を出した。
莉奈の舌を丁寧に舐め、舌全体を吸い込んで唾液を揉み込む。歯磨きのようにすべての歯茎をなぞって粘膜のすみずみまで舐めてやる。
「ああ、莉奈、好きだよ……」
「わたしも……大好き……んちゅ、キス、とけそう……ちゅ」
「俺のこと好きか?」
「……ん……すき……」
「じゃあ、好きって何度も告白しろ」
「……ん、すき、ちゅむ……ん、好きよ……だいすき」
「俺と付き合うか? 本当に付き合うんだな?」
「あ……付き合って……好きだから……おねがい……」
「本気か? 酔ってないよな? 本気で好きで、付き合いたいって言ってるんだよな?」
「ええ……よって、ない……すき……好きよ……付き合って……♡」
すでにイケメンボイスから拓郎の声に変わっていたが、朦朧(もうろう)とした莉奈は気づかないようだ。拓郎の声と莉奈の声で、恋人宣言が録音されていることも気づいていない。

「じゃあ莉奈とエッチするよ？　いい？」
「うん………はじめて……だけど……」
はじめて。
処女。
菜子と同じく、ずっとイケメン野郎に片思いをしていたせいなのだろうが……。
拓郎のペニスに血液が集中して、これ以上ないくらい凶悪な形になった。
「はあ……っ！　はあ……っ！　莉奈の処女、俺が奪うからな」
トップカーストのモデルもしている高慢ちきな美少女なのに、処女。
いやらしいギャップに金玉がズキズキ疼いた。亀頭から先走り汁がぽたぽた垂れてくる。
もう我慢できない。拓郎は満を持して汚い肉棒をピンクの肉唇にあてがった。
「～～～っ」
肉唇にペニスの先端が埋まると、莉奈が全身に力を入れた。
もう少し挿入してみると、亀頭に何かが引っ掛かる感じもする。
「い、いたい……いたい……」
処女膜だ。菜子と違ってけっこう痛がっている。
「頑張れる？　莉奈の初めて、俺が奪っていい？」

「……うん……がんばる……っ」
頑張って処女を捧げてくれるらしい。
なので拓郎は手元のリモコンで電気をつけた。
明るさＭＡＸ。莉奈の美しい顔が苦痛に歪んでいる。まつ毛の長いぼんやり眼が拓郎を捉え、一瞬だけ見開かれて、
「……だれ……？　いや……っ」
「ああっ！　俺が処女奪うぞ！」
拓郎はゆっくりペニスを沈めていった。
「〜〜〜〜〜っ！　い、や……っ！」
莉奈が身体をのけぞらせた。正常位で押さえつけながらゆっくりペニスを挿入していくと、みりみり、ぷちぷち、という感覚がした。
「だれ……痛い……いたい……だれ……いや……っ」
「ああっ！　処女膜破るぞ！　莉奈のマ○コに俺の跡残すぞ！」
「痛い……いた、いた、やめ……痛い」
「俺の生チンポが一生消えない傷残すぞ！　ああっ！」
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
ブッと何かを突き破る感覚とともに、亀頭が膣奥とキスする感覚になった。

「貫通したぞ！　俺のチンポが入った証拠、もう一生残ったからな！」
征服の感触に金玉が震える。未踏破だった膣奥で、むき出しの亀頭が大量の先走り汁を垂れ流している。拓郎の粘膜と体液が、さっそく美少女の神聖な膣奥に徹底的なマーキングをしているのだ。
「いたぃ……あなた、だれ……抜いて」
目の前には美少女の怯えた表情。これはこれで良いものなのでこのまま犯してやろうとも思ったが、痛がらせてばかりも可哀そうだ。
拓郎はリモコンで電気を消した。再び部屋を暗闇が覆う。
「……だれ……あなた……だれ」
莉奈がうわ言のようにつぶやいているので、拓郎は彼女の耳元に近づき、
「俺だよ、翔だよ」
「……ほんとう？」
「どうした？　怖い夢でも見たのか？」
「……よかった、翔がいる……」
「俺が莉奈の処女奪ったよ。慣れるまでキスしよ？」
「……うん……」
理想的な薬のキマり方だった。拓郎は、避妊なしのナマでつながったまま、莉奈と

いやらしいディープキスを始める。
「んぁ♡　んちゅ、ちゅ、んむ♡　へぁ、んちゅ、すき……ちゅむ♡」
しっとり吸い付く肌を抱きしめながら、お互いの舌で唾液を混ぜ合うようなキスをする。美少女の甘い匂いと舌のぬめりを味わいつつ、下半身はナマ挿入したまま亀頭をびくつかせて膣奥の粘膜の感触を楽しむ。
最高だった。金玉がひどくびくついている。トップカースト美少女を騙してラブラブセックスをしている事実に、すぐに射精してしまいそうになった。
「ん……っ♡」
一〇分ほど挿入キスをしていたら、莉奈の膣粘膜がきゅうっと吸い付いてきた。
試しに、ペニスを動かしてみる。
「ん……♡　やっ♡」
痛がらない。むしろ感じている。拓郎はゆっくりと本番セックスを開始した。
「あ……あ……♡」
にゅちっにゅちっ、と水音が出てくる。生のペニスを挿入するたびに、膣粘膜が独特の絡み方をしてくる。菜子の膣は絞るような絡みつき方をしてきたが、莉奈の膣は吸い付いてくるような感覚だった。
さらさらしっとり肌の肢体で吸い付いて、マ〇コでも吸い付く。

すさまじく一体感の感じられるセックスだった。正常位で抱きしめつつキスしながら膣奥を突くと、お互いの皮膚や粘膜の境界が一瞬わからなくなるほどだ。

幸福な射精ができそうな予感があった。しかし、

「あっ♡　あっ♡　……あっ♡　ん、あっ♡」

イケメン王子とセックスしている勘違いが拓郎として不本意に思えてきた。やはり正々堂々『拓郎』とセックスしてもらわなければいけない。

なので拓郎は電気をつけた。

「あっ♡　……あ？」

ナマ挿入の正常位で莉奈を見つめると、蕩けた顔が一瞬で恐怖の表情になった。

「あっ……だれ……翔は……どこ」

「翔くんは俺が預かったよ。戻ってきてほしい？」

抱きしめながら、ドンドンと膣奥を突いてやる。

「あ、かえして……翔を返して」

「おじさんとセックスしたら返してあげるよ？」

「あっ……いや……だめ」

「じゃあ翔くん殺すわ。もう帰ってこないよ」

「いやぁ……翔……をかえして……くすん……」

「じゃあセックスしなきゃ。一〇分だけだよ。ちゃんとセックスしたらすぐに翔くん戻ってくるよ」
「いやぁ……」
茶番だが、莉奈は完全に没入している。面白すぎた。
そういえば恋人として付き合う言質はさっき取ったなと気づく。
あとは恋人セックスの証拠を残すことに集中することにした。
「好きって言いながらキスな。好きって三〇回言え。そうしたら翔くん戻ってくるよ」
「ほんとう……？」
「目つぶって言えば、すぐ終わって翔くんとラブラブできるよ」
莉奈が目をつぶったので、拓郎は唇に舌を滑り込ませた。
「……すき、んちゅ……あっ♡　ん、ちゅむ、あっ♡　すき、へぁ、んむ」
ねっとりと舌を絡ませながら膣を突くと、だんだん莉奈が感じてきた。
拓郎も止まらない。膣奥を激しく突くことにする。
「あっ♡　ん、ちゅ、あっ♡　すきっ！　あっ♡　ん、へぁっ♡　すき！」
朦朧とした意識に言葉で自己暗示をかけさせて、本気セックスのように錯覚させてやる。菜子と同じく淫乱の素質もあるのかもしれないと思ったが……ともかく最高だ。
拓郎は拓郎のまま、この美少女とナマで恋人セックスをしているのだ。

「好き」を三〇回はとうに過ぎたが、拓郎はそのまま対面座位に持ち上げ、莉奈と舌を絡める。
「んぶっ♡　ちゅむ♡　すきっ！　ぁっ♡　ん、すき！　ん、あっ♡」
長い脚に腰を挟まれて、すべすべ肌と密着性交している感覚がたまらない。
録画もできた。そしてそろそろペニスも限界だ。
拓郎は莉奈をもう一度正常位に押し倒し、美脚を抱え込みながら子宮口にこすりつけるようにペニスを動かした。
「ああっ！　もうすぐ翔くん戻ってくるって！」
「あっ♡　や、は、はや……くっ♡！」
「『莉奈にたくさん中出ししてください』って言ったらすぐに戻ってくるって！」
「うそ……あっ♡　あっ♡　うそよ、あっ♡」
「じゃあ死んだ！　翔くんは一生戻ってこない！　俺と一生セックスだからな！」
最奥を激しく突きながら、朦朧とした少女に勢いだけの命令をする。
「あ……あっ♡　やだ、あっ♡　やだっ」
「ほら、莉奈にたくさん中出ししてください、だぞ。ほら言え！」
「り、りなに……たくさん……なか、だし……してください」
「声が小さい！」

「あっ♡　り、莉奈の中に、たくさん中出ししてください……！　あっ♡」
「もっと大きく！」
「り、莉奈の中に、たくさんなかだししてください！　あっ♡」
「もっと！」
「あっ♡　り、莉奈の！　中に！　た、たくさん中出ししてくださいっ！」
あの生意気女に中出し懇願させてやった。何度も言わせた。完全に屈服させた。
征服欲が満たされ、精液がペニスの根元まで上がってくる。
「ああ出る出るっ！」
拓郎は莉奈の口をディープキスで塞ぐ。吸い付く肌の肢体にしがみつき、膣の最奥まで肉棒をぶち込み、黒髪の美少女とすべてを密着させる。
また互いの皮膚の境界が曖昧になって幸福な一体感に包まれた瞬間、
びゅぶぶぶっ！　と亀頭が大爆発した。
快楽のスパークが腰まで駆け上がって激しく痺れた。下半身の神経すべてが原始的な反射に支配される。大量の精液が美少女の膣奥にぶちまけられている。
「〜〜〜〜♡」
　一方の莉奈の膣も拓郎の肉棒に吸い付いてきた。やはり絞り上げでなく吸い付きが得意な膣だ。ペニスを全方向から扱き上げて射精を補助してくる。

肉棒の根元で快楽の火花が弾け続ける。射精がまったく止まらない。
新しいメスへの膣内射精に、本能が念入りな種付けを命令しているのだ。
「孕め孕めっ！　妊娠しろっ！」
おなじみの呪詛を叫びながら、安全日などまったく確認していない美少女の子宮へ無責任に射精していく。
敏感な亀頭の粘膜をこすりつけながら狂ったように白濁液をぶちまけ、普通なら会話することすら許されないトップカーストの美少女に種付けをする。
「ああっ！　しっかり受精しろっ！」
拓郎の妄想癖が加速する。
モデル美脚の優良ＤＮＡを持つ少女の子宮に、短足肥満のＤＮＡを流し込む。この高慢ちきな女の卵子は、拓郎の精子にリンチされるように包囲されて受精させられてしまうのだ。
最高の女を完全支配した喜びに、驚くほど長く射精が続いた。
「ん、翔……どこ……」
とうとう射精が終わった。拓郎がペニスを挿入したまま莉奈の身体の上で脱力していると、同じく力の抜けた莉奈が想い人の名前をつぶやいていた。
しつこいな。翔なんか来ない。

第四章　黒髪美少女、カメラに向かって完全同意する

聖夜が過ぎた。莉奈に考えられる限りの屈辱的な淫語を言わせて、ひたすら危険日中出しした夜が明けたのだった。

ペンションの管理人室。濃厚な連続性交後で気絶するように眠っている莉奈を見つめながら、拓郎はスマホを耳に当てて電話をかけるのだった。

電話をかけた先は菜子だ。巨乳美少女で、莉奈の親友で、莉奈を陥れた共犯。

『……なんですか、こんな朝早く』

声が寝起きだった。現在は朝の五時なので当然といえば当然だが。

拓郎はお膳立てしてやった昨夜のことを聞いてみることにした。

『イケメン王子とのデートどうだった？　つーか今、彼氏と同じベッドか？』

『……翔くんはあなたと違って真面目なので、すぐエッチとかしません』

『クリスマスなのに意気地なしだな。俺なら一晩中濃厚セックスしてやんのに』

『…………』

『まあいいや、で、どうだったんだデートは。そもそも行ったのか？』

『……う……たけど』

呻くような返答に耳を澄ますと、

『……いちおう、行ったけど……莉奈とのデートのはずだったのに、翔くん、ぜんぜん嫌な顔しないで……わたしと楽しく遊んでくれて……』

いつの間にか、菜子が声を震わせていた。

『てぶくろ忘れたから、寒いだろって、手をつないでくれたのが……温かくて』

『………』

『莉奈がひどいめにあってるのに……二人でクリスマスツリーを見てたら……すごく幸せだって思っちゃって……家に帰ったら、涙が止まらなくて……』

やっぱり菜子は優しいのだ。

幸せになればなるほど親友に対して罪悪感が湧くようで……。

拓郎は最高に興奮していた。共犯にしたかいがあった。

『うえ〜ん、おじさんも涙がちょちょ切れそうだ〜、え〜ん』

『………最低っ』

『は？　感謝しろよ、俺のおかげだろ。次も手伝ってやるよ』

『もういりません』

電話が切れた。

再び莉奈を見やると、裸で手錠と足枷をはめられ、部屋の奥で眠っている。

あれだけ汚したはずなのに肌は真っ白で、清潔感を溢れさせている。また汚してやろうという気になって、思わず勃起してしまったが、よく見ると乳房にはうっすら手形のようなアザがあったし、肉唇からは精液が断続的に漏れていて、拓郎が征服した証が残っていた。

昨日の性行為もすべて録画した。「肉便器」や「精液便所」など、最悪の淫語を何度も叫ぶ高慢ちき美少女の動画編集は、拓郎も今から楽しみだったが――。

若干やりすぎたか、という予感もあった。

とりあえず莉奈の隣で、互いに全裸で寄り添って寝る。

「………………」

昨日と同じ、また一時間ほどで、莉奈の身じろぎで目を覚ました。

目を開けると、妙に静かな表情の莉奈がこちらを見つめている。

「おはよう、俺のカノジョ」

拓郎の冗談めかした挨拶にも、莉奈は無表情だ。

「………………いつ、帰してくれるの？　もういいでしょ」

「おとといの夜のセックスが同意だったと、心から認めるまでだ」

「認めるから……」

「じゃあフェラもできるな。チンポしゃぶれ」

「わかった……やるわ。ネットでしか見たことないけど」
莉奈が妙に素直だ。拘束されたまま身体を起こし、拓郎の指示通りに口を開けもする。素直すぎる態度に首を傾げつつも、拓郎はペニスを口に入れ——。
さっと引く。瞬間、がちん、と歯がかみ合う音がする。
またか、とため息をつきつつ、強気な態度の復活にうきうきする。
「お前、家に帰るつもりないだろ。明日の夜にはピル効かなくなるんだぞ？」
「もういい……妊娠してあげる。わかれば即おろせばいいだけだもの。その代わり、絶対にゆるさない……！」
「落ち着け、落ち着け」
「落ち着けると思っているの……⁉ 人を、トイレみたいに扱って……！」
妊娠してあげる、のひと言に拓郎はぐっと来たが、やはり肉便器扱いを懇願させたのが一番こたえたようだ。本当に取り乱している。普通はこんな台詞に益がないことはわかるはずだ。手足を拘束されて無防備なのに。
「落ち着け。こっちはお前の動画を翔くんのSNSに貼ったっていいんだぞ？ お前のスマホ覗いて知ってるからな」
「……もういい、翔にバレてもいい。あなただけは……絶対に許さないっ！」
取り乱しすぎだ。ただし動画を貼り付けたら最後、拓郎自身も豚箱行きのリスクが

高まるので、意地を張るのが最適解ともいえるが。
「とりあえず前に言った通り、悪い口にはお仕置きな」
約束は約束だった。拓郎を噛もうとしたメス猫には、あの仕置きをする。
拓郎は手錠をフックで引っ張って莉奈の腕を固定し、開口器を掴んだ。
「やめて！　もうぜったたんん、へあ――――っ！」
鼻をつまんで口を開けさせ、開口器をはめる。拘束された莉奈の長い脚の間に滑り込んで正常位で押さえつけ、
「ひ、ひあ――――っ！」
唾液をでろーっと落としていく。無防備な莉奈の口腔にたっぷり落とす。
朝一番の痰や鼻くそ混じりの唾液を大量分泌させ、でろでろと落としていく。
黒髪の美少女はこの屈辱の唾液中出しをただ飲み込むしかない。
「これで終わりじゃないぞ」
唾液をコップ一杯は飲ませたんじゃないかと思ったくらいで切り上げる。
今度は開いた口に、勃起ペニスを挿入した。
「んう――――っ！」
口が開いたままなので、あまり密着感のないフェラだったが、暴れる舌が亀頭に当たって心地よい。それに涙目で敵意たっぷりに睨んでくるのがいい。

クールな美人の、気取ったファッション誌の偉そうなモデル女の口に、雑にチンポを入れて強制フェラをさせている。いくら睨んできても、拓郎はこの極上メスより圧倒的に上の立場にいるのだ。

優越感が満たされ興奮してきた。単純な刺激としてはそうでもないフェラだったが、しっかり射精感が高まってくる。

なので拓郎はペニスを抜いて、莉奈の胸に跨り、顔の前で扱いてやった。

「は、はへて……はへてはへてっ！」

何をされるのかわかったのだろう。莉奈が黒髪を振り乱して暴れている。

拓郎は命中させるため、莉奈の首もとに馬乗りになってペニスを口に向け、

「はへ――――――っ！」

朝一番の拓郎ミルクを口内に噴射してやった。

ねばついた濃厚な液体が、舌と喉と、口腔全体にへばりついていく。

「おほ！　はへ、かはっ！　ん！　ぶふっ！　ん――っ！」

喉奥に直接噴射すると咳き込んで苦しそうだったが、もちろん口だけでは済まさない。美人顔の朝メイクの下地として、拓郎乳液をぶっかけてやる。

びっ、びっ、と元気よく射精して、莉奈の美顔に、額に、鼻に、まぶたに、匂いのきつい精液を塗りたくっていく。

「ひぁ……ひぁ……っ」
射精が収まると莉奈の喉奥には精液が溜まり、顔はどろどろのホラーだった。
「精液、ちゃんと飲んだら顔を拭かせてやるぞ」
莉奈が喉を震わせながら、ゆっくりと精液を飲み干していった。
約束通り開口器を外してやる。手錠の固定も解いてやる。
「ゆるさない……ひぐ……ゆるさない……」
「タオルは頭の上な」
タオルを床に投げると、莉奈はうつぶせの体勢で精液を拭き始めたが……。
さて、ここからが本番だ。
この美少女の怒りを鎮めるには？　謝る？　なだめる？
答えは——徹底的に屈服させる、これが拓郎の流儀だ。
拓郎を底辺と見下し、良心の呵責なく侮辱を口にしたこの女は、拓郎の嫌悪した社会カーストの権化なのである。
すべてを捨てたバケモノがここで退くわけにはいかない。
今こそ、バケモノがバケモノたるゆえんを示さないといけない時なのだ。
拓郎は『アレ』を決断した。対・気の強い女の必殺技。プライドの高い人間に特攻となる『アレ』を、拓郎は棚から取り出すのだった。

「……ふひっ」と思わず下卑た笑みが出た。
拓郎は『それ』を持ってまだタオルで顔を拭いている莉奈に近づいていく。
美少女のうつぶせの身体に馬乗りになり、
「へっ⁉　あなた、なにをっ⁉」
アレを肛門に——刺した。
「あ——————————っ！」
莉奈が絶叫したが構わずに莉奈の肛門へ二本三本と追加注入していく。
浣腸だった。しかも刺激性のタイプである。
「ねぇあなたバカなんじゃないのしんじられない！　ん、あ、あ、だめ……っ」
力の限り怒鳴る莉奈だが、腹がぐるぐる鳴りだすと途端にしおらしくなって、
「お願い、トイレ、トイレに行かせて……」
「敬語は？」
「お、お願いします！　トイレに行かせてください……！」
拓郎は「わかった」とうなずき、慎重に莉奈を立たせた。
膝を震わせる莉奈の前で、管理人室のトイレのドアを開け、あるものを取り出し、
トイレのドアを閉める。
「ここにしろ」

拓郎がトイレから出したのはバケツだった。
部屋の中央にバケツを無造作に置き、ビデオカメラを手に取る。
隠しカメラはあるが、撮っていることを莉奈に知らせて恥辱を与えてやる。
「ねえおねがい無理。トイレで、お願いだから、トイレで……っ」
莉奈が全身をがくがく震わせて懇願していたが、もちろん許さない。
「だから、トイレあるだろ」
「これ、バケツ……！　バケツよ……っ！」
「いいから、どばーっと漏らせよ。莉奈くらいの美人ならウンコも虹色のビー玉なんだろ？」
「おねがい……おねがい……っ！」
「莉奈ちゃんの♪　ちょっと出すとこ見てみたい♪」
「いや————っ！」
結論から言うと、莉奈はキラキラ光る虹色のビー玉をバケツに垂れ流した。
ケツを拭いて、また浣腸をぶち込み、バケツに勢いよくキラキラさせる。
「おねがいもうやめて！　あ、あ——っ、でる、でちゃうっ！」
「やだ、やだやだ！　何回するの⁉」
「あ——！　出る！　出る！　撮らないで！　いや——っ！」

五回ほど繰り返して、ビー玉が噴き出す音まで全部ビデオに撮ってやった。
「ひっ……ひぐ……ひん……っ」
バケツに溜まった「ビー玉」をトイレに流し、部屋の空気を換気すると、床では黒髪美少女が横たわって、ただすすり泣いていた。
排泄行為。人間の尊厳として最も重要なものを犯してやるのは、プライドの高い人間ほど効果があるのだ。
だがこれで終わりではない。
「おねがい待って……そこ？　違、ちがうちがう！　そこ、入れるとこじゃない！」
拓郎はうつぶせの莉奈の脚を開き、バックの姿勢でペニスを当てた。
もちろん、綺麗にしたアナルに。
「あ――――っ、むりむり入らない！」
めりめりと拓郎のペニスが莉奈の肛門にめり込んでいく。
「ああっ！　お前こっちの処女も喪失するんだからな！」
「たすけて！　おねがいたすけて！」
莉奈が泣いて暴れたので、ローションをペニスに垂らしつつの挿入となった。
ゆっくりと丁寧に、大格闘の末、莉奈の全身が脂汗でびっしょりになった頃、拓郎のペニスは莉奈のアナルに根元まで埋まったのだった。

「か、は……あ……」

莉奈が細かく震えるだけの生物になっていた。アナルはぎりぎりまで張り詰め、拓郎の太い肉棒をくわえ込んでひくひく収縮している。

「おしり……だめ……そこ、いれる……ちがう」

莉奈がカタコトになっていたので、思わず爆笑しそうになった。

「莉奈って、おととい俺と同意してエッチしたよな？」

拓郎はアナルにゆっくりとペニスを抽送しながら、改めて莉奈に訊いてみる。

「はい……しました。どうい、しました」

「よかった、覚えてるんだな。今の気持ちは違うと思うけど、あの時は酔った勢いなりに俺と付き合う気だったもんな？」

「はい……つきあう、気で……いました」

「じゃあの夜の件はそれで終わりにしよう。許してくれるな？」

「はい、ゆるします……ゆるしますから……」

敵意は完全に潰れた。とても素直になった。

アナルを征服されるというのは、こういうことなのである。

誰かにぶち込まれると反射で屈服してしまう穴なのである。さっきの排便もそうだが、これはプライドの高い女ほどその傾向が強く——。

拓郎はペニスの抽送を速めた。
「じゃあ、改めて俺と付き合おうぜ。春まででいいから」
「ん……なんで……そうなるの、ん、苦し、はぁ……っ」
「動画もたくさん撮っちゃったし、そうだな……三月まで俺の彼女になれよ。たまにデートしてくれたらいいぞ。そうしたら全部返して終わりだ」
「ん、ぐ……は、ぁ、っ……嘘、うそよ……」
この台詞を引き金に、拓郎は最終局面に入ることとした。
「嘘じゃない！」
ぱしーんと莉奈の尻を叩くと、莉奈が「ひぁ――んっ！」と変な悲鳴を上げたので、またまた笑いそうになったが、
「俺は約束を守る！　必ず守る！　信じろ！」
力強く宣言しつつ、ぱしーんぱしーんと莉奈の尻を思い切りはたいていく。
「やめ……やめ、やめてっ！　わかった、わかった、わかったからぁ……っ！」
「信じろ！　三月で終わらせてやる！」
拓郎は構わずはたき続けた。莉奈の白い尻に真っ赤な手形が付いていく。
「わか……三月まで……いいからっ！　やめっ、いたい、やめて！　ひぐ……っ！」
まだまだはたく。気持ちのいい破裂音と、莉奈の悲鳴が何度も上がる。

手形が判別できなくなるまで夢中で叩いていると、
「わかったから！　ひぐっ……ま、ママみたいに叩かないで！　ごめんなさい、ひぐっ！　ごめっ……ひぐっ……えー──ん！　ひ、うぇ────ん！」
莉奈が唐突に母親に言及して、子供みたいに号泣し始めた。
アナル責め尻叩きの一つの効果として、人にはよるが、小さい頃の厳しいしつけを思い出しやすいという効果があるのだ。特に上流の厳しい家庭ほど効果が出やすいと、拓郎は経験的に理解していた。
要するに、罰を受けて素直に反省する気持ちになるのだ。
「ご、ごめんなさい！　ふぇ──ん！　ごめんなさい！　ひぐ、え────ん！」
どんなプレイよりも完全に屈服させてやった達成感が、心を満たしていく。
ドストライクのキマり方だった。
「ああっ！　アナルに中出しするぞ！」
「ひぐ、え──ん、ひ、ひぐ、ふぇ────────ん！」
こいつ泣き声が可愛いなと、拓郎が思った瞬間、亀頭が腸内で膨らみ、
ぶびゅ───っ！　とアナルに射精した。
肛門に刺さったペニスが拍動して大量の精液を吐いている。直腸粘膜という薬や異物を吸収しやすい粘膜に、拓郎の精液が注入されている。

「よしよし、泣くな泣くな」
「ふえ――――ん、ひぐ、うえええ――――ん！」
どうしたものかと困ってしまったので、とりあえずバックでアナル中出ししながら、莉奈の頭を優しくなでてやる拓郎だった。

○

拓郎は莉奈が泣き止むまで、抱きしめながら頭をなでてやった。
それから拓郎は莉奈を温泉に連れていって、優しく洗ってやり――。
一時間後。莉奈の手錠と足枷が外れていた。
全裸で正座し、拓郎にビデオカメラを向けられている。
「じゃあ教えた通りの宣言な」
拓郎が言うと、全裸の莉奈が三つ指ついて頭を下げ、
「……私こと黒那(くろな)莉奈は、拓郎さんと、三月までお付き合いすることに……同意します」
彼女同意をした。
憔悴しきった目の奥には拓郎の前で号泣してしまった恥じらいの色があった。

人前で幼児のごとく泣いてしまうだなんて、これ以上ない人生の恥辱だ。
一番恥ずかしい姿を拓郎の前で晒してしまった。さらに慰められてしまった。
もうどんな強がりだってできやしまい。
理想的な完全屈服だった。その証拠に手枷足枷を外しても何も抵抗しない。
さらに、アレも書かせることにする。

●●●●●●●●●●●●●

【彼女同意書】

腐水拓郎様
私こと［　　　　］は三カ月間、貴殿の彼女であることに同意いたします。
その間は、彼女としてキスや性交を拒みません。
またその他の手段による陰部奉仕も最大限の努力をもってすることを誓います。
　　年　月　日
名前

●●●●●●●●●●●●●

莉奈は赤面をして呻きつつも、素直に日付と名前を書いた。
これですべてが完了した。菜子と違い一二回の回数制限はかけなかった。
三月まで好き放題セックスできるかと思うと、今から勃起してくる。
「これで正式な彼氏彼女だからな。三カ月の短い間だけど、よろしくな」
キスをしてやると、莉奈は目をつぶって素直に受け入れた。
「約束を破って、翔くんや海外のサイトに動画バラまかせないでくれよ。今ならわかるだろ？　菜子ちゃんに負けちゃうぞ～」
「……わかってます。……あの時は、冷静じゃなかったので」
アナル征服と尻叩きのおかげで完全に主従関係が出来上がった。
「じゃあ帰るか。着替えていいぞ。二日ぶりの服だな」
そういえば二人してずっと動物みたいに全裸で交尾していた。管理人室にしっかり暖房を効かせていたせいで今まで違和感はなかったが。
莉奈がフラフラと管理人室を出ていったのでついていく。
廊下は寒く、二日ぶりに入った宿泊部屋もひんやりしていた。
寒さにも構わず、莉奈はうつろな目で服を着始めた。
着替え終わると……ニットワンピに黒ストをはいた、超絶美人が現れた。
薄手のニット生地から、スレンダーでいやらしい身体のラインが見えている。

丈の短いワンピから、黒ストの脚がすらっと伸びている。さっき温泉に入ったシャンプーの残り香もする。やはりものすごくいい女だった。
「スマホ……」
荷物をまとめた旅行バッグを手に、莉奈がつぶやいた。
「ああ、スマホは管理人室だな。返してやるからついてこい」
二人で管理人室まで行く。管理人室のドアを開けるとやはり暖かい。拓郎はまだ全裸なのでなおさら暖気が嬉しい。
部屋の中、莉奈が前屈して床からスマホを取った。屈んだ姿勢のニットワンピの尻がひどく煽情的だった。黒ストの長い脚も艶めかしく光っている。
「あっ、何するの……⁉」
「ああっ！　お前が誘ったんだろっ⁉」
拓郎は身勝手な理由を叫びつつ後ろから抱きしめて、発情した犬のようにペニスをすりつけた。太ももに手を伸ばして、黒ストをびーっと破ってやる。
身体を離してしげしげ見やると、破れた黒ストの美脚が恐ろしいほどいやらしく、ペニスがバキバキに勃起してしまった。
「……終わったら、帰してくれるの？」
帰宅寸前の襲撃なので激しい抵抗を覚悟していたのだが、莉奈は涙目ですべてを理

解したようなことを言い始めた。
「……はぁ……はぁ……っ、もちろん、帰す」
「……じゃあ早く済ませて」
受け入れたので、拓郎はそのまま抱きしめてキスをした。いい匂いのする上等な服を着た女を、恋人のように抱きしめてディープキスをする。
舌を絡めて目をつぶると、服についた化粧品の匂いと生地に残った冷気に、新品の美人をいきなり捕まえて犯しているような感覚になった。
そのまま押し倒し、正常位で抱きしめる。
ディープキスしたまま、破れた黒ストの股間に生のペニスをこすりつけた。
「ん……ちゅむ……ん、ちゅ……ん……」
抵抗のなさが、まるで本物の恋人セックスのようだ。
敢(あ)えて淫語は言わせない。キスしながら着衣交尾を続けていると莉奈のマ○コが濡れ始めたので、ショーツを半脱ぎでめくって、すぐに挿入した。
「ん……ん―――っ♡」
キスしたままの莉奈の口から、くぐもった声が上がった。
そのまま腰を振り、普通のセックスをした。莉奈の吸い付く膣をむき出しの肉棒でしっかり味わってやる。

服と化粧品の匂いを嗅ぎながら、黒髪ロングの美人モデルという普通の男なら手すら触れられない雑誌上の存在を、ナマで堪能する。
肉体の奥深くまでペニスをぶち込んで思うがまま所有物扱いをする。何度もセックスしたのにくらくらするほどの興奮があって、もう射精しそうになった。
「莉奈、服にぶっかけていいか？」
「だめ……んっ……普通に中に出して……んっ」
莉奈にとっては中出しが普通になったのが面白すぎた。
「じゃあ、おねだりしろ。何か覚えてるだろ。なんでもいいぞ」
「り、りなの中に……たくさん、射精してください……」
控えめで無難だがそれがよかった。恥じらう姿に初々しさを覚えて、まるで莉奈という美少女と初セックスをしているような気分になって、
「ん……っ！」
傍から見れば絶叫も呪詛もなく、この二泊三日で一番静かな射精だったが、拓郎の肉棒は驚くほど力強く拍動して、大量の精液を吐き出していた。
黒スト美人に挿入したペニスが、新しい極上メスだと勘違いして、一発で妊娠させるために気合の射精をしているのだ。
「ん……は……ピル、まだ間に合うかしら」

膣奥に叩きつけるような射精が終わる寸前、そういえば危険日なことに気づかされ、ペニスがまたまた、ばびゅ、とひと噴射した。

「明日の夜まで大丈夫だぞ、理論的には」

間違って危険日中出しをしてしまった普通の恋人たちのような会話だった。

拓郎は、とりあえずはこれで終了と莉奈にねっとりとキスをして、クリスマスの性の饗宴は幕を閉じたのだった。

——正確に言うと、拓郎は自社ワゴンで莉奈を街まで送ってやったものの、破れた黒ストを脱いだ莉奈のナマ脚ミニワンピについつい興奮してしまったので、ワゴンの後部座席で中出しカーセックスをしてから解放してやったのだが。

○

翌日の朝、拓郎のペンションも通常稼働となった。

客を迎える準備をしながら、拓郎はスマホを覗く。

菜子の時と同じように、莉奈のスマホに仕込んだ監視アプリで『覗く』。

【メッセ　莉奈・翔】

莉奈『クリスマスはごめんなさい、本当に』
翔『全然いいって。それより体調大丈夫か？』
莉奈『もう大丈夫。それより菜子と、その、クリスマス何かあった？』
翔『なにが？　普通に買い物して飯食って……クリスマスだったから中央公園のツリー見てから帰ったけど、それだけだ』

ここから沈黙が長かった。
莉奈はさぞ悔しがっているだろう、憧れのイケメンとの年に一度しかないデートのチャンスを逃したのだから。代わりに行った菜子ちゃんは、すごく幸せだったみたいだぞ〜、と拓郎は心の中で冷やかしていると、

翔『焦りすぎたかな、って思った』
莉奈『どうしたの？』
翔『すまん、こっちの話だ。なんというか、また三人で遊びたいなって思った。受験もみんな推薦で受かったし、学部は違うけどみんな同じ大学だし、また三人でいる機

会も増やしたいなって思ったんだ』
莉奈『……それもいいかもね』

拓郎は大笑いした。
この男、日和(ひよ)って振り出しに戻しやがった。幼馴染どちらか一人を選ぶ決断からまた逃げたのだ。ぐずぐずしている間に、美少女たちは一人ずつ徹底的な中出し征服をされてしまったというのに。
なんて弱いオスだと思ったが……拓郎は同時にあの美少女たちを助けてやろうとも思った。この恋を宙ぶらりんにさせない。必ず着地させてやる。
それは同時に、拓郎にとって最高に楽しい『遊び』の結末にもなるからだ。
翔『とりあえず正月、みんなで初詣行こうぜ』
莉奈『うん』

莉奈との契約が終了する三月に合わせ、拓郎というバケモノは、最悪のシナリオを書き始めるのだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索